

河芸町上野は、江戸時代を通じて伊勢街道の宿場町として繁栄していました。東海道の日永追分（現在の四日市市）から分岐した伊勢街道は、神戸宿・白子宿・上野宿・津宿・雲出宿・松阪宿・小俣宿などを経て伊勢神宮に向かいます。伊勢街道は、遅くとも江戸時代初期の寛永年間（1624～1644年）には整備されていたようですが、上野藩主として分部氏が治めていた文禄年間（1592～1596年）には既に同様の町並みが形成されていたと考えられています。



宿場には公用旅行者用の本陣や脇本陣のほか一般庶民用の旅籠、茶屋などがあります。延享2（1745）年の記録によれば、上野宿は旅籠13軒、茶屋29軒、酒屋5軒など家数313軒、人数1、157人とあります。

街道を歩いていると、道が鉤の手状に折れている部分があります。これは遠くまで見通しがきかないような仕掛けで、城下町にも見られる技法です。

上野宿のほぼ中央、中町にある折れの近くには、弘法大師のお告げによって水がわいたと伝えられる「弘法井戸」があります。街道を行く旅人には憩いの水として、村人には生活用水として使われていました。

また、伊勢街道は別名参宮街道とも呼ばれるように、伊勢神宮参詣を目指す旅人でにぎわっていました。とりわけ、およそ60年に一度の「御蔭参り」の時には、多くの人が伊勢神宮を訪れています。明和8（1771）年には、伊勢神宮に近い宮川の渡しをわずか4カ月の間に207万人もの人が通過していることから、そのにぎわいがうかがえます。この上野宿も相当数の人が宿泊、休憩していたに違いありません。

当時を伝えるものは、少なくともありませんでしたが、連子格子の残る昔ながらの町屋が昔の面影を今に伝えてくれます。

（「広報津」平成22年12月1日号）

